

新しい学としての Urbanica (ウルバニカ、都市哲学)

橋本 典子

<要旨>

「環境を場とした都市論」はまさに現代の問題である。「環境」は今や「自然」ばかりでなく、我々の造り出した「技術連関」も、そして伝統的な「文化」も含まれる。これらの環境が集結しているのが「現代都市」である。未来の世代のための新しいライフスタイルを提案するために、近代化以後の都市哲学を構築することを目的とした。事例研究として阪神・淡路大震災10年後と愛知万博を調査し、「人間」と「環境」の相関関係の考察が最も大切であることを確認した。何のためにかかる関係性を強調するのか？エネルギーを得るための物質的持続性ではなく、Sustainable Society（持続可能な社会）を創造するために、論文ではアーレントの新しい公共性（Publicity）の考えを提示した。「人間」そして「いのち」を維持する社会を、「大地」を地盤とし、他者との関係性を構築できる社会を、平和を実現出来る社会を、近代的大都市の中で造らなければならない。それは都市に住む「人間」の社会との関わりを中核にしか考えられない。革新的理論とその実践が求められている。

キーワード：ウルバニカ（都市哲学）、持続可能性、公共性、技術連関、環境

Keywords: Urbanica (Philosophy of City), sustainability, Publicity,
Technological Cohesion, circumstance

都市哲学序論

21世紀が始まって既に6年が過ぎたが、新たな形での中東戦争、テロリズムの脅威、そして地球的規模の自然災害のニュースが連日伝えられている。20世紀は二つの世界大戦を経験し、それ以前に比べて一般市民の戦死者が最も多い<戦争の時代>といわれてきた。21世紀は平和な世界を建設する時代にすべく努力を始めたばかりなのに、一般の生活世界には平和はおろか安全性すら確保するのは難しい。21世紀に我々は何を新たに創造することができるのか。20世紀は19世紀の終わりから継続した都市建設をある程度世界的に拡大した時代であるといえるだろう。パリの都市改造は第一回印象派展の行われた1878年頃に既に大規模な形で行われていた。それは市民と呼ばれるに相応しい新しい社会階層の出現によって支えられ、当時の支配者が自らの権威を誇示する形で都市を建設し、市民は自らの生活の向上を理想として、市民としての自覚を持って新しき文化の中心地、パリの建設に参加した。しかしそれは社会の固定化を暗黙のうちに認めることになった。つまり、19

世紀には、都市を建設することは同時にそこに住む市民社会の階層の固定化を意味した。

現代社会を哲学的に考察するために問題を都市に収斂したい。その理由として次の5点を掲げることができる。

- 1) 我々の環境の変化が急激でありその現象は都市に象徴的に現れていること、
現在の我々の環境は自然ばかりでなく、技術と技術が道具的性格を残しつつ大規模な形で結びついた技術連関となっていること、この二つの考えが従来の建築や都市論の中で考えてきたことであった。それでいいのか。
- 2) 都市問題は未来の我々の生き方に大に関係していること、つまり都市生活者としての我々のライフスタイルをどう設定するのか、という問いである。
- 3) 従来の都市計画は建築物の集合という視点が中心であったがこれからは場の創造としての都市論を考えねばならないこと、
- 4) Urbanismとしての都市論ではなく、Urbanicaとしての都市哲学を構築していくことが要請されていること、

丹下健三は東京都庁を建設する際にパリのエコール・ノルマル・ボザールでの個展でウルバニズム (Urbanism) を主張し、それに基づく都庁の模型を展示した。彼によれば、首都東京の首庁舎は都の行政の中心であり、都庁のある副都心を中心として周辺部に向かって都市化現象を拡大して行く、という発想である。つまりウルバニズムは、中枢とその派生部というヒエラルキーが構造的にも、行政的にも設定されたものであり、かかる組織化された近代的都市の創造こそ人々の生きる場である、とした。政治的・経済的ヒエラルキーが現代都市を構造化出来るのか？そのような住み分けは可能なのか？

- 5) 都市は現在のような情報化時代が到来するまで 宗教、文明、文化が発信される場所であり、情報発信の中枢であったこと、しかし、その情報の質は現在とは異なっていたので、我々は新たな問題として情報化時代の都市を考えていくべきであろう。どの時代でも、その時代の情報化の最先端の問題が、コミュニティとしての都市に集約的に現れていたことは考察しなくてはならないであろう。ルネサンスのネーデルラントの商業都市もまたハンザ同盟の商業都市もそうであった。それは都市を中心として情報化をどう見るかによって現代の新たな新旧問題となるであろう。

研究プロジェクト「環境を場とした都市論」の中で考えるべきことは、環境をどう捉えるかであろう。私は20世紀の後半になって我々は複雑に絡み合った三つの環境の連関の中に場を占めていると考える。三つの環境とは、自然、技術連関、そして文化環境である。自然とは人間存在が自分の周りに意識を及ぼしたとき、まず一義的に「我々の周りにあるもの」、つまり環境＝自然と考えた、その意味での自然である。つまり我々の周囲の自然とどう調和するのか、古代ギリシアでは、ターレス (Thalēs) が、万物のアルケーつまり

源、原理を探究しこれを水とした。ここから自然哲学者の探究が始まる。これは自然を抽象的に見、客観化することの初めであり、哲学の出発点であった。これ以前の神話の世界では自然は擬人的に捉えられた。日本では、自然の森羅万象に神々が宿ると考え、多神教の考えが支配的であり、現在でも神道の考えを人々は受け入れている。例えば20世紀において西田幾多郎は『善の研究』の「自然」の章で次のように指摘している。「自然の本體はやはり未だ主客の分かれざる直接経験の事実である。」¹⁾「真実在は主観客観の分離しないものである、実際の自然は単に客観的一方といふごとく抽象概念ではなく、主客を具したる意識の具体的事実である。」²⁾「要するに我々の主観的統一と自然の客観的統一力とはもと同一である。之を客観的に見れば自然の統一力となり、之を主観的に見れば自己の知情意の統一となるのである。」³⁾と。自然は主客未分の事実という考えは魅力的である。西田幾多郎は次のようにも言う。「斯の如き自然の生命である統一力は単に我々の思惟に因りて作為せる抽象的概念ではなく、反つて我々の直覚の上に現んじ来る事実である。我々は愛する花を見、又親しき動物を見て、直に全體に於いて統一的或者を捕捉するのである。之が其物の自己、其物の本體である。」⁴⁾西田によれば、主客未分の直覚こそ物の根底に潜む不変の本體を捉えることが出来、それこそ事象そのものである。かかる事象を西田は「自然」と呼んだ。そして優れた芸術家や宗教家は之を直覚で捉える、と考える⁵⁾。現代においても日本人は心情的に西田の考えを受け入れやすい。

しかしここで我々は客観的に自然を考える科学の立場を取って、都市論では地球的規模の自然を対象として環境論を考えなくてはならないであろう。第二の環境である技術連関とは「機械と機械とが道具的性格を確保したまま、大規模な形で連関して環境になったもの」である。我々の環境は今や技術的にシステム化され、我々の行為すら具体的にはコンピューターによって制御されている。特にすべての近代国家は技術化を目指してきた。我我はその延長線上にあり、ポスト・モダンと言いながら近代化そのものから離れられずにいる。更に第三の環境である文化環境とはそれぞれの地域の歴史そしてそこでの人間の生活、更に我々は風土としての個性と特殊性とを無視することは出来ない。文化環境の点からは、我々が普遍性と個性及び特殊性との間にいかにバランスを取るかが問われている。グローバリゼーションをどう都市論の中で考えるかも大きな課題である。

環境としての自然

「自然」とは、周知のごとく「自ずから然り」の意であり、明らかに生成の意を内含する。日本の自然観を考える場合に、『古事記』の国造りの話は大きな示唆を与えてくれる。「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、みな独神と成り坐して、身を隠したまいき。」ここでは既に神の名前が「中心」を表す名前、「生産、産出」の名前で呼ばれている。更に、「葦

牙の如く萌え騰る物に因りて成れる」という形容詞が神についており、これも自然の生成を暗示している。例えば伊邪那岐神と伊邪那美神の二柱の神の名前、イザナギとイザナミは海の波を暗示しており、ここから少なくとも我々の国が出来たころには周囲は自然現象に囲まれていたこと、そして自然が意識のうちにあったことがわかる。中国の思想の中では四大つまり、地・水・火・風を論じることで「自然」を考えるという立場がある。聖書の「創世記」でも人は土から造られた。従って自然といえば、我々現象的世界で生きる人間にとっては「大地」が最も身近で、大地は我々の生を支えるものであり、しかも我々は死ぬと土葬されていた歴史を持つのであるから、「大地・土」と我々との関係は密接である。「現在、日本では火葬と定められているが、焼かれた後の灰も骨も、いつかは土に還されていく。土はたしかに、われわれの肉体が還る場所であるということは明らかといわなければならない。ゆえに大地は、われわれを最後に抱きかかえてくれる場所である。そのとき、自然物としてのわれわれを抱きかかえるのであって、われわれがもっている魂や精神が、もしそれとは別な超自然的なものであれば、それがどこに行くかということは別として、自然としての肉体が還っていく場所は大地である」⁶⁾大地は単に個人の墓場ではなく、社会の墓場でもある。つまり、複雑な古代都市の様相も過去の時代の社会構造を告知する証言者となりうるからである。考古学がこれを記述し、保存している。例えばマヤ文明やポンペイの遺跡はその時代の人々の生活や社会構造を証言している。古代都市は都市論について我々になにを語るのか。他方「大地は、命がそこから出てくる源でありながら、同時にまた、命が尽きたときに、そこに還りつくいや果ての場所である。しかし、そこから、また、春は新しい命が萌え初める。大地は、それゆえ、生命の死が生命の生となってくる秘密の再生の場所である。」⁷⁾大地は養分を貯え植物の場合成長を確保する場となるので我々は生命の再生の源とみなし、そして「母なる大地」と呼び、これを、我々の立っている場、我々の存在を確保する場として人間の実存の地盤とみなすのである。

大都会の大地

大地は今、如何に考えられているのか。大地は都会生活の中で、また技術連関の中で消えかけている。都会生活の中で大地が露出しているところや舗装されていないところを見つけるのはとても難しい。大都会になればなるほど舗装されずに土が露出しているところはなく、大地の影は隠れている。20年前の東京では、校庭にコンクリートを流し、隠れた大地を痩せ衰えさせてしまった。「現代の機械的、技術的な文化生活の中では、大地が大地としての土のすがたを消していったが、それでも、複雑な活動面としての都市空間を支える基本的な台座としての意味は、いまだに失われていない。……都市生活が始まるその発端においては、敷石舗装などにより、大地そのものを隠して都市空間が確保されて来た。その発端においては、大地はむしろ不要なもののように思われ消されていった。そして消され消されて今に至ってみると、むしろ大地の一かけらでも私生活の中に持つこと

は、たとえようもない贅沢になってくる。ヴェランダの上にわざわざ土を運んで、そこに植物が植えられてくることもある。土のある広い庭園は現代都市では富豪にしか許されない。都市空間がその自己展開を行きつくしてしまうと、再び大地はその貴重さを人間に悟らせる。ゆえに綿密に都市計画がたてられると、その中に公園や緑地帯が要求され、少なくとも公共的には大地が土としてあるという状態が望まれる。』⁸⁾ 現在、東京の都心では大きなビルの屋上に「癒し」の空間として休み時間に散歩をしたり読書したりする小公園を設置しているところが増えてきた。そこでは土盛りをして、水を流し、木々を植え、ビジネスマンに自然との触れ合いの機会を与える努力をしている。更に小規模な形で農業経験をさせるために野菜やハーブを育てているところもある。ところで、大地が都市空間を支える「台座」であるというのは重要な指摘である。「台座」である限り、斜面であってはならず、それは平面としての広がりを持った安定性の場の確保である。斜面は人間にとって恐怖の対象である。両側が切り立った斜面で、前のパースペクティブの開けていない所は恐怖の場でしかない。そして都市の高層ビルの床は大地と平行でなくてはならない。土砂崩れ、土砂災害が頻発するようになったのは大地の斜面化の結果である。

その意味でディズニーランドのジェットコースターはたとえ遊びであっても、大地との平行性と安定性に対する挑戦である。それを人は喜ぶ。しかし大地が突然揺らぐという異常事態は都市に住む市民にとって、また都市哲学を構築する場合に致命的であろう。

事例研究（Ⅰ）

私はこの研究プロジェクトの第一年目（2005年3月）に阪神・淡路大震災の10年後の都市復興の現地調査を行った。震災当時、兵庫県の職員であった表具氏に震災後の都市計画の現状を説明して頂き、それらの具体的場所に案内して頂いた。その時のメモを次に報告する。

阪神・淡路大震災の震源地は淡路島の北の海の中である。地震の結果地表に断層面が出た淡路島の北淡町に何回か行った。そこには「震災記念館」があり、新しい断層面をそのまま残す形で記念館を造った。断層は、明らかなところで前後80センチメートル、左右1メートル位ずれて、一列に並んでいた植木が途中で移動し、直線をつくって並べられていたブロックが断層に沿った形で並び換えられていた。大変なエネルギーである。近くでは山の頂上が30メートル上ったとも聞いた。震源地が近いわりに北淡町の死者は少なかった。それは住民が高齢者ではあるが、一戸建ての家が多く近所の人々が家族構成その他について互いに知っており、共同体（コミュニティ）が成立していたために、下敷になった人がいてもその家のどこにいたかわかり、ポイントを決めて救出できたからである。この場合、地域の情報の確かさ、顔を知っている者同士の助け合い、その共同体メンバーであるとの意識が大きかった、と思われる。更に家と家との間に適当な空間があったことも

幸いしている。断層による段差が新たに出来ても農地の中だったり、林の間だったりしている所は10年後の現在、自然がカムフラージュして何の違和感もない。

今回、震災復興がうまくいった例（琵琶町）と復興事業が途上とはいいながら未だ成功とはいえない地域（長田区）それらの復興を手作りで行なっている代表者と会った。

神戸新聞社会部の長沼氏は当時のメモを羅列して書いている。「『地域自治』という信念が支えになった。町内自治といってもいい」「都市計画決定を覆すことは難しい。ならば、行政のお仕着せでなく、自分たちでまちづくりを考えよう」「住民が戻らなければまちづくりは始まらない」「まちづくりは人づくり」「人の出会いが街をつくる」と。つまり、町を造るには街を場として人間を育てること、人間がそこに関わらなければ本当の復興は難しい——ソフトによってハードを造ること、それが大きな課題であったようである。しかしこの問題は古くて新しい問題のように思われる。

一方、神戸市都市計画総局の藤井氏は「このような緊急時は時間との戦いになるため、施工者側が区画整理事業の仕組みやそれに付随する制度など、さまざまな情報を迅速かつ正確に分かりやすく伝えることが大切であると思いました」と書いている。情報化社会だからこそ、確実な情報をわかりやすく適確に伝えることが大切であることは自明のことであるが、現実には発信者も受け手も未だ育っていないのが実情であろう。

琵琶町の特質として次の5点があげられている。

- 1) 消防団、婦人会、老人会、ボーイスカウトなどの組織があったこと、そしてそれらがしっかり活動できていたこと。
- 2) 軸になる当時50歳代の、街づくりに積極的に活動する人々がたくさんいたこと。
- 3) 街づくりの活動と共に、次の世代の活動する若者を育てられたこと。
- 4) 外からのボランティアを積極的に受け入れる心を持っていたこと。
- 5) 世代間を越え何でも話しあえる、そしていつでも開いている具体的な場をもっていたこと。（「琵琶ポケット」）

「復興活動をしていて何が一番大切だと思いますか」という私の問に対して、池田氏は次のように答えている。——人間と人間との関わりが最も大切であるが、特に創造的な活動のためには世代間の人間関係の量と質が大切である、と。琵琶町には「琵琶スポット」と名付けられた集会所があった。それは「琵琶町二丁目のまちかど公園（ポケットパーク）予定地にコンテナハウスの仮設集会所」で「震災翌年の夏」に発信の場としてできた。「住民が気楽に立ち寄れる場所、遠くに避難している方たちが一時帰ってこられた時にちょっとひと休みできる場所、みんなの合言葉「ポケットで会いましょう！」にできる場所」が彼らの理想であった。池田氏はこの10年の街づくりでリーダーとして育てられ、その次の世代のリーダーが育つのを助けてこられた。池田氏はジャズのベース奏者として、クラリネットの北村氏を初めとして全国に支援の仲間を持っている。神戸が国際的な

港として、外に開かれた気質の人が多く、ジャズを初め様々の文化を受容する場であったことが幸いするという事も指摘できよう。池田氏にお会いした翌日、三宮から北野に向かう道路上に Jazz Street のプレートを見つけ、すぐそばにあるジャズの生演奏が聞こえてくる店の前を耳を傾けその音楽を楽しみながら通った。

(長田地区の例) 昔、漁師町、戦後はいくつかの工場を中心として、その従業員をその家族が工場の下請けの内職を行ない、それらの人々の食生活を支えた。これらの人々の生活の基盤であった駅からの商店街を中心に、海から国鉄、阪急線を軸に広がった大きなコミュニティを形成していた地区、長田地区は、その殆どが震災で全壊、半壊、その後の火災で全焼し尽した。——今日では JR 新長田の駅からの地区は高層ビル群と新たに建設された広い道路があり、JR の高架線の車窓から見る限り新地区として復興しているかのように思われる。駅からの広い道路の両側には商店が戻ってきてはいるが、権利金が高いためになかなか戻れないようで、全てがもとのままとはいかない。私が一番驚いたことは、日曜日の買物をする時間なのに駅からの商店街に買物客が殆どいないことである。アーケードでおおわれた商店街は開店休業のような感じで、広くした道路が寒々しく感じられた。震災前の駅前商店街は買物をする人々で活気に満ちていた。10年目を迎えて戻ったものの商売がうまくいかず借金のために土地の権利を手離さざるを得なくなった店もぼつりぼつりみえた。

これに対して県からの震災復興事業を請け負ったマンション建設業者は、大規模の展示場を持ち、そのほぼ80%が既に売れていた。しかも値段の高い方から売れたそうである。買い手の多くは長田地区に住んでいた40歳代の人々で、10年間資金を貯めて戻ってきている。その意味で長田地区は火災で全て焼失したために、逆にここへの郷愁は大きいといえる。最近建設され、すぐに完売したのは、ペットを飼って一緒に住めるかなり高級なマンションだそうである。しかし、焼失した再開発地域のすぐ外側、海沿いには一階建ての五軒長家が一緒になった長屋群が沢山残っている。戦後すぐの建物らしく木造で風呂はない。従って地域のお風呂屋さんが健在である。家の前には物干棹の柱が林立して長屋と長屋の前に立つ柱と柱の間隔は3メートル位、物干の柱と別の物干の柱との間は石が並べられた小さな道で人が一人やっと通れる程である。もし現在の消防法を適用すれば、危険地帯ということになるだろう。その近くには市場がある。昔は買物客でごったがえしていたそうであるが、現在では五・六店舗でやっと一店舗が開いている程度、開いている店の特徴は、店主の人情味あふれる対応と、品質の良さ、新しい動きに対応する商品開発が来ていることである。最近その一角に食料品を中心としたスーパーマーケットが新たに出来て、そこには人々がかなり出入していた。

再開発された駅前の新しいビルの中には広いスペースが造られ、沖縄の特産品、食料品、織物、工芸品、蛇三線の店、レストランがあった。沖縄の店を入れた理由は、長田地区には沖縄出身者が多いから、ということであった。駅前の「そごう」もこれらの沖縄の店も売れ行きは良くないそうである。新しいビルには足の確保のため新しい地下鉄を通し

た。その地下道、その上の一階、二階には食堂がずっと並んでいる。しかし新たに大阪から進出してきた店も今では閉店し、開いているのは一軒しかなかった。夜遅く地下街を歩く寂しさ、閉店ばかりの店が両側にある道を通る恐ろしさは想像できない。

では人々はどこへ行ったのだろうか。商店街の会長の話では、この10年は人々を破産させ他の所に行かざるを得なくなった人々を造り出し、タイミングよく土地と権利を売り別の土地を購入した人々が、同じ地区に新たな場所を確保して生活できている。しかし人々が買い物に来なければ「これからの10年が心配である」、という。住人たちはJRで三宮や神戸の元町に買物に行ってしまうようである。県と建設業者が主導の震災復興事業の10年後を見て、実践の難しさ、実践の途中で捨ててきたもの、積み残した問題の大きさを実感を伴って経験した。

持続可能な社会（Sustainable Society）

神戸東部新都心は海沿いに新しいビルが並んでいる。その中心にあるのが「防災未来館」と「ひと未来館」である。「防災未来館」で阪神・淡路大震災の被害の実態、そしてその追体験をした後で、人々が「ひと未来館」で森の生物や自然の変化、そして自然である人間を理解するように全体が構成されている。自然は時として人間の予測を超える破壊力をみせつけるが、同時に自然の豊かさ、恩恵は現代の我々が想像する以上である。現代のように科学技術が進んでいると我々は「本来人間は自然であること」を忘れてしまう。現代技術社会に於いていのちの尊厳と他者と共に生きる社会の構築は難しい課題である。阪神・淡路大震災は余りに多くの人命が失われたので、残された人々はあらゆることをするのに人間を中心に置いて21世紀の都市のあり方を模索した。（『翔べフェニックス』創造的復興への群像（財）阪神・淡路大震災記念協会、2005年、779頁）「いのちを守るーコンセプト」の章で、復興及び都市創造のコンセプトが次のように示されている。

＜コンセプト＞

- ① 人類史上初めてといわれる高齢社会下の大都市直下型地震による災害の中で、われわれは、「いのち」の尊厳と、生き残った者が心身ともに健やかに「生きる」ことの大切さを再認識した。
- ② 震度7の激震地にあつて、今後、わが国でも有数の国際交通結節点となる臨海工業地帯の再開発にあたり、震災からの教訓を生かした阪神・淡路大震災を記念するプロジェクトとしての都心づくりが求められる。
- ③ そのため、神戸の中心部に位置して、豊かなウォーターフロントを有する神戸東部新都心を、「いのち」を守り、健やかに「生きる」ための新しい都市文明を先導する都市空間として整備することをめざす。

当時復興本部、都市住宅部計画課参事であった東徹志氏によれば、コンセプトのキー

ワードは「健康・福祉・文化・産業」であった。「いのち」と人間が健やかに「生きる」ことを軸に10年間の復興を実行してきたことは素晴らしいことであったと私は思う。何故ならば1970年代まで中心に位置づけられていたのは科学技術の振興であり、すべての問題を技術革新によって乗り越えようとする動きであったからである。2030年に向けても、この阪神・淡路大震災の復興と都市づくりのコンセプト、＜「いのち」を守り、健やかに「生きる」ための新しい都市文明＞を創造することは維持されなくてはならない。しかしこのことが2030年に実現されているかは、非常に難しいように思われる。何故ならば＜「いのち」を守り、健やかに「生きる」＞ことは、人類の歴史が始まって以来常に考察されてきたことである。そしてその実現は20世紀には意識されてはいても、人々は科学技術の進歩がこれを実現すると考えたし、経済的発展がこのことを信じさせていた。

阪神・淡路大震災から12年が過ぎ、当時小学校6年生であった生徒が社会人になろうとしている。震災の記憶を如何に次の世代へ身を以て伝達していくかが大きな課題になっている。それは、語り伝えることによって、その都市に住む人々の共通経験とすること、である。そのため、リクール（Paul Ricœur）が論理的に明らかにした Narativité（物語可能性）の問題としてこの問題を考える必要がある。かかる Narativity（物語可能性）が世代間の対話を可能にし、了解不可能性の限界を破ることになる。同時に当時50歳から60歳であって様々な活動の中核にいた人たちが高齢化して、彼らがこれからどのようにして生活の糧を得るか、またあのような悲劇的状況から立ち上がる過程を経てきたのか、つまり大都市災害後の都市市民の生き方を我々がどう受け止めるのか、更に大きな問題が課せられている。

長田地区の例でも明らかなように、国や県等の公共団体が経済的にサポート出来るのは初期段階である。それを長期的に続け、地区として独立した活動を行う為にはかかる理念を受け継ぐ若い世代の育成が大切である。また企業体がそれを良い形で受け継ぐことは、企業体の活動の根本理念とかかる活動とをどう関係づけていくかにかかっている。その点で新たな NGO 活動に期待が寄せられる。長田地区がこれからどのような道を選択するのか、また長田地区に郷愁の気持から戻った壮年の人々が都市の文化形成のためこれからどのような貢献をするのか、どのようなコミュニティを形成するのか見守ることが必要と思われる。

事例研究（II）

2005年8月「自然の叡智」とのテーマを付けられた愛知万博で「環境とどう調和しながら人工都市、イベント会場を造っているか」更に「愛知万博の跡地を、自然環境を守りながらどのように整備するのか」という研究調査のため、万博そのものに行ってみた。愛知

万博は、環境との調和がひとつの大事なコンセプトであったので、研究プロジェクト終了後もその経過をみていきたい。

- 1) 新エネルギープラントが NEDO との協力で発電施設として万博会場の一部に造られていたが、そこでは分別収集されたゴミから水素を取り出し、燃料電池に使い、さらに太陽光発電、新型蓄電池などによって会場全体をまかなうエネルギーを発電する新しい施設をつくっていた。興味深かったので内部を見学したかったが、かなわなかった。

2) バイオ・ラング

パネルに植物を植え付け、それらを垂直に重ねて、巨大な緑化壁を建てる計画であった。そして時々粉霧状の水分を補い、コンクリート壁面の温度上昇を抑制することによってヒートアイランド現象の防御策として利用する予定で実験的に建設された。これは、同時に CO₂ 削減の実験的試みでもある。

3) ゴミの分別収集

万博に訪れた人たちを巻き込んでゴミ分別を実践していたのが印象的だった。そこには未来への教育的配慮がみられた。

尋ねたパビリオンの中で最も環境に配慮している点を具体的に展示していたのはオマーンとアラブ首長国連邦であった。共に石油産出国であり、農業や他の産業の可能性が極めて低く、気温も常に日中高く夜中には寒い砂漠地帯にあるという悪条件のため必然的に環境問題を考えざるをえないのである。

環境への負荷をどう数字化するか、は大きな問題である。何を以て考えるのか、また環境について国境はないのに、対策は国単位で行われているのが実際である。国際間協議が不可欠であるが、京都議定書の例でわかるようにこのような利害対立は調停が難しい。更に国の力関係が大きく影響を及ぼすのであるが、これは是非共解決すべき問題である。

環境と原子力

環境問題を考える視点は国によって異なる。チェルノブイリ原子力発電所の事故以来厳しい決断をする国と安全性を主張して経済の発展を優先する国と二つに分かれている。アメリカはスリーマイル島での原子力事故以来ナーバスに対応している。

- 1) パリの郊外、車で1時間程高速道路を走るとオルレアンの中に入る。オルレアンの近くには2基の原子力発電所が煙を上げて稼働していた。車が通る道は原子力発電所のすぐそばを走っているが、人々は危険性を感じないようである。フランス人にとって原子力発電は余り違和感がないようで推進派に属する。
- 2) ドイツのウルムはドナウ川に沿った、大聖堂で有名な美しい町である。ドイツは緑の党の躍進によって自然環境を守る立場の人が比較的多い。ドナウ川は護岸工事はな

く、自然のままを残しており、春には白鳥、鴛鴦、鴨等が子育てをして平和そのものである。ドナウに沿った国際会議場の近くには老人ホームが建てられている。その老人ホームの電力、湯等ファシリティは全て建築的にも美しい太陽パネルによる太陽発電のエネルギーを使っている。川を上り下りする船も太陽パネルの付いた船である。しかしその一方で遠くに二基の原子力発電所が日曜日にも稼働しもくもくと煙を上げていた。

- 3) デンマークのコペンハーゲン空港に降りる直前、海の中に10基以上の風車（Windmill）が立っている。また田園地方へ行くと、麦畑、野菜畑の中に風車が沢山立てられている。デンマークでは国民投票によって原子力発電を選択しない決定をしたそうである。従って国内には原子力発電所は全くないそうである。理由は国が狭いために原子力発電所の事故がたとえ1件でも起こると被害が全ての人に及ぶからである。
- 4) イギリスは古くからの原子力発電推進国である。ダービーを電車で通った時、原子力発電所の周りを軌道が回っていたのに驚いた。その発電所の周りには羊が放牧されていて、それらの羊は事故が起こった場合の知らせの動物である、とのことであった。
- 5) 日本は例えば東京電力の場合、通常毎日使われている電力の80%以上を原子力発電に依存している。しかし周知の如く事故は小規模であるが多発している。新たに青森の六ヶ所村に原子力核施設を造ることになり、その全体を出来上がる直前に見学した。2000年11月だったと思う。それは核施設を中心とした新しい都市建設であった。見学したのは稼働する前であるので、人々は地域振興と連動させて若い世代の新しい仕事の確保、科学技術的な知的労働の増加とそれによる若い層の活性化、過疎化からの脱皮等地域にとって大きなメリットがあると考えていた。見学時100以上立つ重機のクレーンは異様な姿に見えた。核廃棄物の埋蔵場所、核燃料の置き場、再処理施設、核燃料棒の保存池等、すべてに安全性が詠われていた。例えばジャンボ旅客機が衝突しても内部の核施設には何の影響もないような壁が作られ、安全性という点では最新の技術を駆使しているとのことであった。また敦賀原子力発電所では、その施設のすぐ隣に熱を利用した温泉施設、アイソトープを利用した病院施設も建設した。それは地域社会に貢献する目的であった。現実には六ヶ所村も敦賀も今大きな問題を抱えている。

近代化と都市

オルセー美術館展で興味深い写真を見た。アルフレッド・スティーグリッツ（Alfred Stieglitz, 1864-1946）の「希望の都市」（La ville de l'ambition, City of Ambition, 1910）という作品である。「希望の都市」という訳が正しいかどうかは別にして、その情景は中心にエンパイアステートビルがあり、その前景に20階ぐらいの高層ビルがいくつか建ち、その前の工場からビルの上にもくもくと煙がたなびいている。それはニューヨークの町を海

から撮影した情景であるが、工場の前に停泊している船からも真横に煙が出ている。1910年頃の希望に満ちた光景はこのように、技術が、そして工場や船からまさに活動していることを象徴する煙が多量に出ていることであった。この写真はその社会のオピニオン・リーダーだったのではないか。

しかし大量の煙は都市市民の健康に害を及ぼした。東京ではスモッグ注意報が出ると、マスクをした小学生が校舎の中に駆け込んでいた。それが連日であった。京都議定書が作られ、発効し始めた現在、といっても批准をしない国は沢山ある。オゾン層の破壊、地球温暖化、等「近代化」に伴う問題は山積している。では、「近代化」とは何であったのか？ ヴァッティモ (Gianni Vattimo) によれば、存在を否定するような契機、例えば存在を否定する死或は非存在、これを考えることがポスト-モダニズムである。これに反して「近代化」とはあらゆる物を肯定的に受け入れること、人間が技術を獲得して、かかる技術によって新しい事物を提示することである。人間の存在を、否定を介して深く考えるのはポスト-モダニズムのひとつの在り方である。今や、我々は自己の存在自体を危うくする物に取り囲まれている。環境の視点で考えれば、公害に始まる、様々の汚染物質、我我を守っていた物質の崩壊、意図したのではなくて結果として生じてきた、人間にとって異質的な物質、それらが我々の存在を脅かしている。

現代都市論と公共性 (Publicity) — 新たな課題

- 1) 現代都市の典型は、科学技術に満ちた巨大都市である。そこでは、あらゆる国籍の人が生きていける。従ってそこはあらゆる宗教、異なった世界観を持つ人々が行き交う空間である。そこでは価値体系の共存 (co-existence) が目指される。そして、そのためには、他者を受け入れる徳、「寛容」が大事となる。そして、新たな価値を知り、認め、許容しなくてはならない。今道友信が言うように、都市は「エコエティカで述べられた徳の意味論的変容として寛容が試される場であるとともに、絶対性の相対的対立を介して、全く新しい価値観の誕生が望まれる哲学的修練のアゴラとなる。」と⁹⁾。古代ギリシアのアゴラでソクラテースが若者達と対話をしたように、巨大都市で我々は他者とコミュニケーションをしなくてはならない。それは互いに他者を理解しあうためであり、都市の中での対話による共・創造 (co-creation) のためである。ハンナ・アーレント (Hannah Arendt) がユダヤ人であるが故にナチスに追われ、パリを経て無国籍のままアメリカのニューヨークで『人間の条件』や『全体主義の起源』等の執筆をしたように、絶望した人間が自己の根本的な在り方、どこにも属さず、独立した一人の人間として、私と国との間の社会、公共性に生きることが現在では要求されている。我々は都市の中での公共性を追究しなくてはならない。
- 2) 都市における「身」の問題を考えるべきであろう。「身」とは肉体としての体ではな

い。なぜならば肉体では物体（Corpus）に近い物であるからである。この考えでは、デカルト的二元論に陥ってしまい、行為も合目的になる。「身を尽くしてもあわんとぞおもふ」という目的的行為であり、心と体が一つになっている状態を都市の中で経験しなくてはならない。

- 3) 人々は沈黙する。技術連関の中にと、人は何事も話さずに、ただ機械の指示に従って動く。スイッチを押すだけ、自分の周りに人がいることさえ気がつかない。間－主体性、相互－主体性を学ばないと、巨大都市の中で公共性を理解することさえも出来ない。
- 4) 公共性とは何か。他者を自分の内に認め、関係を内的に結ぶことである。このことが相互に行われなければ、都市は空虚な器だけの物にしかない¹⁰⁾。

結

「環境を場とした都市論」というプロジェクトの全体テーマの中で都市哲学ウルバニカ（Urbanica）を考察して明らかになったことは次の三点である。

- 1) 研究対象を環境と考えると、我々は現在地球的規模での温暖化を無視することができない。この問題について考察するには詳しいデータを必要とするので我々は科学者と共同研究すべきである。環境の問題は、地球全体を考えることであり、人類の未来をどう考えるかについて、現在から未来を見通した積極的な見解を提出しなくてはならない。情報化社会に於いて電波が国境を越えていた事実がベルリンの壁の崩壊という現実を作り出した。同様に環境問題の視点から Sustainable Society（持続可能な社会）を創造するためには、既に国境は超越されているのであるから、オーギュスタン・ベルク（Augustin Berque）が指摘するように、「物のシステム」という視点ではなく、「風土」の問題も入れて考えるべきである¹¹⁾。その場合に普遍性と個性との複雑な関係性を考察することが最も重要である。
- 2) 理論と実践の総合が現代の都市論に於いて希求されている。理論と実践の総合は18世紀のカントが既に行ったことであった。実践の問題になると阪神・淡路大震災からの復興の報告の中でのインタビューからわかるように「人づくり」が根本的な問題である。その際にカントの言葉「人格（Persona）を目的として扱うのであって、決して手段として扱ってはならない」¹²⁾を我々は重視しなくてはならない。Sustainable Society のためには、ルシアン・クロールは次のように語っている。「都市やコミュニティをサステイナブルにするには、精神的な関係性の密度を深めるために芸術を用いることだろう」¹³⁾、つまり様々な物との精神的な関係性の密度の深まりが必要である。これは既にカントが第三批判（『判断力批判』）で試みたことでもある。都市に於ける芸術の問題を考えなければならない。
- 3) Sustainable Society のためには新たな公共性（Publicity）の考えが必要である。東

京大学出版会の公共哲学のシリーズはその必要性を明確にしている。それはアーレントの言葉「自由 (Freedom) が出現したのは、かれらが暴政 (Tyranny) や暴政に優る悪に反抗したからではなく、かれらが「挑戦者」となり、自らイニシアティヴをとり、そのことによってそれと知ることあるいは気づくこともなしに、自由が姿を現わすことのできる公的空間をかれらの間に創造し始めたからである。」¹⁴⁾ この公的空間こそ Publicity (公共性) の場である。これこそ今道のいうアゴラである¹⁵⁾。

注

- 1) 西田幾多郎『善の研究』西田幾多郎全集、岩波書店、82頁。
- 2) 前掲書、87頁。
- 3) 前掲書、87頁。
- 4) 前掲書、86頁。
- 5) 『善の研究』参照。
- 6) 今道友信『自然哲学序説』講談社学術文庫、1993年、80頁。
- 7) 前掲書、87頁。
- 8) 前掲書、92-93頁。
- 9) 今道友信編『存在と価値』放送大学教育振興会、190頁。
- 10) 現代技術社会の倫理、エコエティカ (生圏倫理学) の中でウルバニカ (Urbanica) は大事な部分を占める。Jean Ladrière は「メタファーとしての都市」という題で論文を書いている。
- 11) 服部圭郎編・著『サステイナブルな未来をデザインする知恵』、鹿島出版会、2006年、241-258頁。
- 12) Immanuel Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Felix Meiner Verlag.
- 13) 『サステイナブルな未来をデザインする知恵』、22頁。
- 14) ハンナ・アーレント『過去と未来の間』引田隆也・斉藤純一訳、みすず書房、2005年、3頁。
- 15) 今道友信『存在と価値』参照。前掲書の訳注でもかかる空間を「アゴラ」と指摘している。